



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第十八主日A年（2026年8月9日）

第一朗読：列王記上 19 章 9 a、11－13 節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 9 章 1－5 節

福音朗読：マタイによる福音書 14 章 22－33 節

三つの朗読から

三つの朗読から見えてくるのは、あれかこれかと惑う人間の現実です。

第一朗読の預言者エリヤは、自分の使命としてイスラエルからバアルの信仰を取り払うことを決意します。カルメル山でバアルの預言者たちに勝利をおさめますが、バアルの礼拝者である王妃イザベルからいのちを狙われます。エリヤは南の荒れ野へと逃れ、自分の信念がゆらぎ始め、「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください」（列上 19 章 4 節）と死を願います。そんな折、神のことばがエリアにささやきかけます。

第二朗読でもパウロは惑っています。「どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」（ロマ 18 章 39 節）と宣言したパウロは、今日の朗読箇所です。「同胞のためなら、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよい」（19 章 3 節）とまで語ってしまいます。キリストを否定した同胞であるユダヤ人たちのために悲しみ、苦しむのです。

福音朗読では、ペトロに代表されるお弟子さんたちが惑っています。舟は強い風の中、漕ぎ悩んでいます。イエスさまに「来なさい」といわれてペトロは水の上を歩き始めますが、急に恐れにとらわれて、沈みそうになります。イエスさまのもとに行きたいという思いと、風と水による恐ろしい現実の中でペトロの心は揺れ動くのです。しかし、イエスさまは「すぐに手を伸ばして捕まえ」てくれました（マタ 14 章 31 節）。千々に乱れる人間のこころの中にイエスさまはしっかりといてくれるのです。ですから、エリヤのように、またペトロのように助けを求めて叫ぶことが大切となります。

さて、今日の福音朗読は五千人に食べ物を与えるお話しの続きとなります。

五千人もの人が満腹になったのは「夕方近く」（１４章１５節 フランシスコ会訳）の出来事でした。『マタイによる福音書』の作者は最後の晚餐の場面を意識していたのかもしれませんが。今日の朗読箇所でも「夕方」（２３節 新共同訳）、「夜が明けるころ」（２５節）と暗闇の中での出来事が語られます。時間的なつながりは先週と今週とではあまりないかもしれません。むしろ、夜の闇という世俗世界の中で奮闘する初代教会の苦悩が背景にあったのでしょうか。

また、旧約聖書が福音書の前ぶれとする視点から考えてみると（これを予型論といいます）、先週の福音の箇所は砂漠でマナを食べた出来事（出１６章）と関連し、今週の箇所はイスラエルの民が紅海を渡った出来事（出１４章）と結びつくかもしれません。

２８節の「主よ、あなたでしたら、……」に注目してください。

直訳は「主よ、もしあなたなら、わたしが水の上をあなたの前に行くように命じてください。」です。「もしあなたなら」は二つの理解の可能性を秘めています。一つはペトロが湖上の人影をイエスかどうか疑って「主よ、本当にあなたでしたら」という意味と、「主よ、あなたでしたか、では水の上をあなたの前に行くようにわたしに命じてください」という意味です。恐らく後者の方の理解がよりふさわしいでしょう。なぜなら、お弟子さんたちは後にイエスを「あなたは神の子です」と信仰告白するからです（３２節参照）。しかも、２６節ではイエスさまのことを「幽霊」だと「怯え」（フランシスコ会訳）ています。つまり、イエスさまを幽霊だと判断したのではなく、むしろ判断力が鈍り、幽霊のように見てしまったのです。お弟子さんたちは恐怖のあまり、信仰が弱くなってしまっているのです。お弟子さんたちに恐れを生じさせたのは「強い風」と「水」です。「来なさい」と呼びかけるイエスさまの方を向き続けていればよかったのですが、恐れで視線を足下の水に向けてしまって、「沈みかけ」（３０節）てしまうのです。